StrikeWitches ～Neuroy Scouts～

Eagle3718

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

どうも皆さん、ｕｐ主のＥａｇｌｅ３７１８です。

今回初めて投稿させていただきます。

拙い作品かと思いますが、よろしくお願いします。

テストが終わり友人含む３人で遊びに行く予定を立てていた。

しかし、トラックに突っ込まれポックリと逝ってしまった。

神様によってスト魔女世界に転生させられた俺達。

その先には何が待っているのか。

ＳｔｒｉｋｅＷｉｔｃｈｅｓ　～Ｎｅｕｒｏｙ　Ｓｃｏｕｔｓ～

開幕する！

全機偵察行動を開始せよ！

目　次

プロローグ ―――――――――――――― 1
登場人物情報 ―――――――――――――― 6
〜Neuroy Scouts〜1937 扶桑海事変編
MISSION―01 〜蒼穹の誓い〜 ―――――――― 11
MISSION―02 〜潜入偵察開始〜 ―――――――― 22

プロローグ

はい。みなさんに質問です。私は今どこにいるでしょうか？

正解は

……

……

……

……

……

……

……

どこだろうなここ。

よし、まずは状況確認だな。

周りは白一色、見渡す限り白、白、白である。が、うおっ！まぶしっ！とはならない。

次　に　俺　の　身　体　の　状　態　は

……

は？

待て素数を数えて落ち着こう、２，３，５，７，１１，１７，２３

……良し落ち着いた。

さて、今の俺の身体の状態なんだが、”青いモヤ”のようになっていた。何を言ってるのかわからないだろうが俺も何を言ってるのかわからなかった。というポルナレフ状態はさておき、まだ状況確認が終わってない。

最後に記憶に関してだが、やはりといったところか異常がある。

まず、名前が思い出せない。次に姿が思い出せない。最後に家族、

友人に至るまで名前、顔が思い出せない。
フムン。驚きすぎるのはかえって人を冷静にするらしい。
「おっ、漸く揃ったな」
その声で思考を中断する。その声は”揃ったな”といった。つまり俺以外に誰かいるということ。周りを見渡すと、やはり俺以外に二人いた。やはり俺と同じような見た目である。
「ほう、意外と冷静な奴らだ」
かえって冷静になっただけだろう。そう思う。
「まあ前置きはここまでにしよう。まず、ぬしらはわしらの暇つぶしのために死んでもらった。これからぬしらには、所謂”神様転生”というのをして貰う」
大方そんなところだろう、と予想はしていたので今更驚く必要はないだろう。約1名大はしゃぎしているが。一度なってみたいなどと言っていたし、俺自身分からない訳じゃない。
「あぁ、転生先だがＳｔｒｉｋｅＷｉｔｃｈｅｓ世界にネウロイ側として行ってもらう」
さっきまで跳ねていた奴が固まった。まぁそうだろう。
「それと、姿はこっちでぬしらの記憶を参考に決めさせてもらった」
そう言ったところで目の前に鏡が浮かび上がる。そこにはＨＥＬＬＳＩＮＧの大尉がいた。ネウロイになるのにこれは必要なのか？
隣を見ると友人が作ったオリジナルのけもフレキャラもう一人は不明、多分うちの子というやつだろうアイツに画力があったかは知らんが。
「んじゃ、いってらー」
で、ＧＹＯＵＺＩが現れた。

は？
二人も同じように思っているらしい。　ＧＹＯＵＺＩは手に持ったうちわみたいなやつ（名前知らん）を上に掲げるとうちわみたいなやつがものすごく輝きだし眩しさに顔を覆った所で意識が暗転した。

意識が消える前、俺は
（なんでそこでＧＹＯＵＺＩなんだよ……）
そう思った。

「行ったようだな。あとはそれぞれに機体の記憶を与えってと、これでよし。あとはせいぜい楽しませてくれよ？」
そのつぶやきが誰かに聞こえることはない。

……声が聞こえる。
「全く、なぜ彼奴は理解できない！」
……誰だ？お前は…周りはなにも見えない。どこだ？ここは……。
「あぁ起きた…ようだな。んっ？私か？私は―」

１９３７年ＸＸ月ＸＸ日

■■■■ヨリ特殊偵察戦闘小隊各機ニ通達。

扶桑皇国方面ニ対シ大規模進行ヲ行ウ。

特殊偵察戦闘小隊ハ扶桑皇国方面ニオイテ偵察行動ヲ要請。

返答サレタシ。

#0605　FRX—99　LAFE　作戦内容受領

#0721　Tu—160　BLACKJACK　作戦内容受領

#0206　TYPE—97　TENPU—NE　作戦内容受領

扶桑皇国方面ニオイテ偵察行動ヲ開始スル。

登場人物情報

ー機密文書持ち出し不可ー

閲覧しますか？

〈はい〉　　〈いいえ〉

ネウロイコアナンバー０６０５

編隊機ナンバー　Ｂ―１

戦闘時モデルＦＲＸ―９９　レイフ（戦闘妖精雪風ＯＶＡ版）

人型時モデル大尉（ＨＥＬＬＳＩＮＧ）

戦闘時モデル

ＦＲＸ―９９　レイフ

スペック

全長：１８．０ｍ

全幅：１４．５２ｍ

全高：６．２８ｍ

最高速度マッハ２．２（偽装速度１，１５０ｋｍ）

巡航速度マッハ１．１６（偽装速度７５０ｋｍ）

限界高度：２４，８００ｍ（偽装高度２０，０００ｍ）

武装：

２０ｍｍビーム砲×１

主翼上ハードポイント×２

主翼下ハードポイント×２

胴体下ハードポイント×６

その他、各種可視光・赤外線カメラ、赤外線ラインスキャン、空間受動レーダー、コンフォーマル・マルチバンドＥＳＭセンサー等の各種偵察装備を搭載。

主翼は折り畳み可能な軽い上反角のついた前進翼で、最高速度で飛行する際は裏返って後退翼となり、着陸時には垂直に立ててエアブレーキとして使用する。垂直尾翼は存在せず、機首には後退角のついたカナードを装備。エアインテークは胴体下部及び上部左右の計３

基、上部の２基はラムエアモード時のみ使用される。エンジンノズルはベクタードノズル。
元の機体がハイスペック過ぎたため、神様の手によりスペックダウン。それでも高スペックなので偽装という形でスペックダウンした。
エンジン自体の設計等はそのままなのでリミッターを外せばスペックを戻すことも可能。
２０ｍｍビーム砲は連射速度、威力ともにＯＶＡ版に準ずる。
ハードポイントはまだ使えずアップデートを行えばミサイル等を装備することも可能である。
非戦闘時モデル　大尉
身長は１９０ｃｍと大柄。原作の大尉は喋らないがココの大尉は喋る。
性格は寡黙であり、必要とあらば味方を切り捨てる事が出来る程度に冷酷である。
転生する時、小説版戦闘妖精雪風のＢ―１３レイフの記憶を植え付けられた。

ネウロイコアナンバー　０２０６
編隊機ナンバー　Ｂ―２
戦闘時
Ｔｙｐｅ―９７　Ｓｅ　Ｔｅｎｐｕ―Ｎｅ
スペック
１３．２ｍｍビーム×４（上下２門づつ）　４７ｍｍビーム×１
最高速度　９８４Ｋｍ／ｈ
適正高度　海抜
最高高度１０７００ｍ
旋回時間　１８．３秒

上昇速度　３９．６ｍ／秒
本来なら対地戦闘機だったが、対空にも使えるという事で採用し、最高速度と共に加速性も求めた機体。
１秒当たり７ｋｍ／ｈのペースで加速出来るが、その反面エネルギー保持は良くはなく、１周旋回すると２００～３００ｋｍ／ｈはスピードダウンする。なお、この作品ではある程度現実的な性能で、実際、スペックは戦後ジェットレベルである。
機首武装しかないネウロイとなったが、運動性は中々良い性能で、加速性と重心の位置のお陰もあり、特異な機動で機首武装を補っている。時代背景の都合で９８式から９７式に変わった。
最近では、１３．２ｍｍビームを全方向に撃てるようにする改修を施されたというはなしがあるが、前方以外にはまだ１度も撃ったことはないらしい。

元機体名　ヒノダ技術　Ｘ３Ｈｉ２　９８式対Ｓｅ用特殊戦闘機
天風　２１型
元機体説明
元々オリジナルのレシプロ戦闘機なため、スペックこそ曖昧だが、現代の技術で作れるような設計で、速度や上昇力を補うため、「Ｍｅ２６２　Ｃ」のように、ワルター機関が別に積まれたが、ネウロイ化した際は墳式のみとなった。Ｓｅとは、とある世界の特殊不明生命体の頭文字で、この機は、すべてのこれを駆除するという目的で作られた。いわゆる２次創作の名残である。
経験の浅い者でもある程度は戦えるよう、水銀式の自動トリム装置が付いていたり、視界確保のため操縦席は主翼より前に配置、炎上しても搭乗員がある程度無事なよう、燃料やエンジンは全て操縦席より後ろに配置された。
武装は硬い装甲を貫徹できるよう、貫徹力４１０ｍｍ／５００ｍのヒノダ技術の４７ｍｍ砲を使用、副武装にプロペラ同調式１３．２ｍｍを配置した。先尾翼にして下がった運動性を補った。

ヒト型時　カエン　Ｆ２Ｋｎ　Ｘ（オリジナル）

上記の世界の住人として作られたカナンというキャラクターだったが、その後、それの先代という形でオリキャラ第１号の派生としても採用し、それを改造したのが本作品のキャラクターである。性格は、物事を哲学と理論で考えるタイプで、無理なことにはかなり消極的になる。自分で作った機体なだけあって、機体を使いこなす。なお、モデルは女性だが、本作品では低身長（１５１ｃｍ）な男性である。元のカエンは１８４Ｃｍだ。

転生する際、特殊不明生命体との戦闘で撃墜されたヒノダ技術　Ｘ３Ｈｉ２　９８式対Ｓｅ用特殊戦闘機　天風　２１型の記憶を植え付けられた。

ネウロイコアナンバー　０７２１

編隊機ナンバー　Ｂ―３

戦闘時モデル　Ｔｕ―１６０　ブラックジャック　（Белый лебедь ビエールイイ・リエービエチ）

スペック

全長　５４．１ｍ

翼幅　５５．７ｍ（後退角２０度）５０．７ｍ（３５度）３５．６ｍ（６５度）

全高　１３．１ｍ

最大水平速度　９５０ｋｍ

上昇率　３８ｍ／ｓ

上昇限度　１５，００６ｍ

機体は胴体から主翼まで滑らかに厚さを変化させたブレンデッドウィングボディを採用しており、固定翼部の前縁は角度が大きい後退翼となっている。

アクティブＥＣＭ防御装置、レーダー警報受信機、が装備されている。
可変翼である主翼の後退角は２０度、３５度、６５度の三段階から手動で選択する。離着陸においては２０度、高速飛行においては６５度を使用する。
主翼は、前縁のほぼすべてにスラット、後縁最外側にドループ・エルロン、その内側に横に３分割されたダブルスロッテッドフラップ、上部に片側５枚のスポイラーを装備する。垂直尾翼と水平尾翼は全体が可動する全遊動式となっており、垂直尾翼の固定部前縁から胴体背部の主翼後縁部までの間にドーサル・フィンを持つ。
ネウロイ化しても、その弾薬蔵は健在であり最大１０，０００ｋｇ搭載可能である。
武装は全身にあるビーム発射口の他、１０，０００ｋｇ　まで搭載可能な弾薬蔵がある。
人型時
見た目は銀髪、碧目で色白。身長は１７５ｃｍ体格は細身である。性格は常にニヤついており皮肉屋で愉悦犯である。戦場においては味方の緊張を適度に抜くことができる、がやりすぎて怒らせてしまい後からボコられる。
転生の際とある世界線のＴｕ―１６０　ブラックジャックの記憶を植え付けられる。

閲覧を終了しますか？
〈　はい〉　　〈いいえ〉

～Ｎｅｕｒｏｙ　Ｓｃｏｕｔｓ～１９３７　扶桑海事変編

ＭＩＳＳＩＯＮ―０１　～蒼穹の誓い～

１９３６年

第一次大戦終結より２０年近くを経て。

かの壮絶な戦いが世界に残した傷痕はすでに癒えつつあり。

遠い異国の小規模な戦闘の報も、その束の間の安寧を揺るがす程ではなかった。

しかし、かすかにたち昇り始めた暗雲は、確実に世界に影を落としつつ……。

人類はやがてくる脅威に対抗するための、新たな”力”の開発を急務としていた。

かつて鋼鉄を貪る異形の怪異（ネウロイ）と戦った者達。

人々は敬意を込めて彼女達をこう呼んだ。

”魔女”と。

そして今、またひとり。

１９３７年７月７日

舞鶴近郊講導館道場

「はぁっ！」
バシッと竹刀の当たる音が響く。
「一本！」
そう、勝負の終了を告げる。残心をし多少呼吸を整え相手に礼を言う。勝利したのは右目に眼帯をした少女、
舞鶴海軍付属小学校６年生
坂本美緒（さかもとみお）　１２歳である。
「やれやれ…もう動ける奴は居ないのか…」
右手をあごにあて少し不満げにつぶやいたのは、
講導館剣道　師範代　兼
舞鶴海軍航空隊所属
扶桑海軍少佐
北郷章香（きたごうふみか）　１９歳である。
「はあ～魔女候補生がこれじゃあな～いくら平和だと言っても全く先が思いやられる…」
彼女の視線の先にあるのはすでに息を整えこちらを見ている坂本と、その先で降り重なっている魔女候補生である。
「ここに坂本以外で気合いのある奴はいないのか～」
とそこに影が差し込み思い出す。
「っと、いやひとり居たな」

バシィッと音を立てて竹刀が交錯する。
「フッ、今日こそ決着を付けるぞ！美緒っ！」
ミミを生やしながらそう啖呵を切ったのは
舞鶴海軍付属小学校　６年生
若本徹子（わかもとてつこ）　１２歳である。
「望むところ……！」
坂本もミミを生やしながら応える。
「二人とも元気だなあ～。若い子はこうでなくちゃ」
そうはっはっはと笑う。

勝負は佳境に入り坂本は突きの構えを取り、若本は横凪の構えを取りー

「はあああっ!!」

勝負を決めにかかる。

坂本の振るった竹刀は若本の左、頭一つぶんのところへ。

若本の振るった竹刀は坂本の左側頭部すぐ近くにあった。

暫しの静寂。セミの鳴き声だけが聴こえる。

その静寂は北郷の

「ふむ、若の勝ち…かな?」

というセリフによって破られるが、まだピリピリとした雰囲気が残る。が、

「ごめんなさいっ!遅れちゃいました!」

そのピリピリとした雰囲気を木っ端微塵に砕いたのは、

舞鶴海軍付属小学校　５年生

竹井醇子（たけいじゅんこ）　１１歳であった。

「「……」」

場を静寂がまた支配する。先ほどまでのピリピリしたものでなく気の抜けたものであるが。

「……へっ?」

その静寂の意味がわからず混乱する竹井。

「……チッ……引き分けだ!自分の魔眼も制御できない奴相手に勝った気分にはなれないからな…」

興が削がれたのだろう。若本がそう言い放つ。

「!!」

それに反応する坂本。

「…やれやれ、お昼にするか…」

側頭部に手を当て大きくため息をつく北郷。

随分と苦労しているらしい。

所変わって飛行場
「うわあー!!ひろーーい!!私こんなに広いところ初めてです!午後は飛行訓練なんですか?」
腕を大きく広げよろこぶ竹井。
「うん、ちょうどよかったからね。こういう気持ちのいい日は外で食べたほうがご飯も美味しいよ」
そう言いながら手に持った弁当箱を見せた。

「ここでこうしているとなんだか空の上に居るみたいです」
そう頬にご飯粒を付けた竹井がのびをしながらごちる。…後ろでみかん入りおにぎりを食べて顔を青くしている若本がいるが気にしない。
「空と海の境目がなくなって、風といっしょに自分もどこかへ飛んで行けそうで」
そういう竹井の目の先にはどこまでも蒼い海と空が広がっている。
「ははっ。本物の空はもっといいぞ~。どうだ坂本、君もそろそろ正式な魔女として訓練を受けてみる気はー」
そう北郷が空を見上げながら坂本に聞く。が、
「…ごめんなさい…私には…そんな力……」
眼帯を押さえながら弱々しく答える。
「…はぁ。その眼…か」
北郷はその手の上に自身の手を添え魔法力を流す。

「なあ坂本、私は魔女として軍人なんてやっているが根は平凡な人間だし、はたから見れば二十歳も過ぎない小娘さ。私には怪異(ネウロイ)から世界を守るなんて出来ないし、扶桑軍人として恥ずべきことかもしれないが、本音を言えば扶桑も無理だ」
二人に使い魔のミミと尻尾がはえる。
「私に守れるものは精々この舞鶴の町と、大切なものを守りたい。この気持ちくらいなものさ」
すくり、と北郷が立ち上がり軽く腕を広げ続ける。
「でも、君のその眼は違う。きっと舞鶴(ここ)に居る誰よりも多くの存在を守れる、私は…そう信じているんだ。
ほら…空はこんなに広いんだ。君が飛ぶ場所なんていくらでもあるさ」
と、けたたましくサイレンが鳴り響く。
「なんだっ!?」
「敵襲ーー!!方位三四〇!飛行型!数っ　三!」
切迫した声色で兵が告げる。
「先だって艦隊と接触した怪異(ネウロイ)か…!?こんな所まで…」
北郷が呟く。
「回せーーっ!
君達は早く安全な場所に避難していなさいっ!!いくぞ!若本っ!」
そう坂本達に告げ候補生を引き連れ空へと上がる。
しばらくしてから青空の中に白い線を3本見つける。
「あいつか…?」
(こっちは飛べるといっても候補生達…。私を含めて皆実戦は初めてだ…。どこまで出来る!?)

安全な場所へと避難した竹井と坂本。
「……」
「美緒ちゃん…みんな、大丈夫かな…」
坂本の袖を掴み不安そうに竹井が尋ねる。
「今は……うん、でも…！」
「えっ…どうしたの？ここからじゃ何も見えないよ…」
僅かに風が吹く。

「わっ！わっ！きゃあっ！」
ネウロイにより一人落ちる。ネウロイはまだ一機も落ちていない。
「くっ！」

（私に飛ぶ力があれば…でも…魔法力が…）
「…っ！」
「美緒ちゃん…。」
迷う。が、
『君はきっと舞鶴（ここ）に居る誰よりも多くの存在を守れる』
北郷の言葉を思い出す。
『私はそう信じているんだ』
「先生…。私は自分で自分の力が信じられません…。空を飛びたくて、魔女（ウィッチ）になりたくてここにいるはずなのに、私のこの右目は一度だって……」
それは独白。
「美緒ちゃん…」
「見果てぬ夢を視せるだけなら、いっそのこと無くなればいいって何度も思いました…
…だけど
そんな私だけど、信じてくれる人がいる……！
きっと空（むこう）で待ってくれてる！

だから!!」
眼帯を持ち上げ魔眼を発動させる。
「私に出来ることは、この眼で視ることだけ…、ただ視るだけ。でも、たったそんなことでこの気持ちを!想いを守れるのなら…っ!しっかり観るんだ…!」
「頑張って!美緒ちゃんっ!」
竹井が声援を送る。
「もっと遠く…もっと…もっと……っみ!視えた!?」
三機のネウロイを発見する、が。
「でもっ、あれは…!みんなに知らせなきゃ!」
坂本が急に走り出す。
「美緒ちゃん!?」
「そうだ!」
急に走り出した坂本に困惑しつつも追いかけるように竹井も走り出す。
そしてたどり着いた場所はストライカーユニットを格納している場所。
「よかった。まだ残ってた…!」
「お　おい…!君たち!こんな所で何をしている!早く避難を!」
そう、たまたま見つけた整備兵が叫び、竹井の手を借りて取り付けられるストライカーユニットを見て顔色を変える。
「あっ!駄目だ!その機体はっ…!「坂本美緒!!発進!!　」」
何かを伝えようとした整備兵だったが魔導エンジンの音と坂本が発した大声にかき消され届くことはなかった。

〈…舞鶴方面！高度６０００！数は３機！ネウロイの別働隊です！〉
インカムから声が響く。
「この声…！坂本か！」
「あいつ…！」
北郷は坂本が飛んで来たことに驚き、若本は漸く来たかとでも言うように鼻を鳴らす。
「私が先行して奴らをひきつけて…」
〈無理だ！もういい！あとは任せろ！〉
坂本の息は上がり酷く汗をかいている。
「…あれ？急に力が…はいら…なっ……」
ボフッ、と音を立ててストライカーが煙を吹く。北郷からは、煙が二つに分かれさらに片方が二つに分かれるのを確認する。
「なっ！」
煙を確認してすぐダイブ、加速し海面スレスレを飛び坂本の救助に向かう。
「言わんこっちゃない…！」

「まったく…あんな機体で初めて飛ぶなんて…何て無茶苦茶な奴だ…後は私に任せて君は休んでいなさい」
「せ……んせい……」
坂本がそう絞り出す。体は震え顔色も悪い。
「なに心配するな、言っただろう？舞鶴くらいは守れるってな」
坂本を下ろした後そう言い残して北郷は空へと上がっていった。

「さて…」
目の前にはネウロイが残した3本の白い雲、その先端にはネウロイが見える。
「坂本(あいつ)に失望されたくないからな」
腰に携えた二本の扶桑刀を抜く。
〔講導館剣術免許皆伝北郷章香、推して参る!!〕

北郷が戦っている空域のはるか上空。高度２０，０００ｍに”ソレ”はいた。

”ソレ”は黒くハニカム状の模様がある事からネウロイであるとわかる。が、高度２０，０００ｍという高高度まで登れる機体は人類側には無い。
さらに速度は、７５０ｋｍと高速でありネウロイにもこの速度を出せる機体は”ソレ”を含め３機しか存在しない。
”ソレ”の見た目は一般的な飛行機よりも大きく、翼は前に伸びていた。垂直尾翼に当たる部分はなく、機首は鋭く前に伸びている。その機首も途中で二股に分かれ、胴体へと繋がっていた。
機首と胴体が繋がっているあたりには、大きく後ろへ後退した小さ

な翼が左右に生えていた。そしてその間には、円筒状のパーツがあり前方は赤く彩られていた。
その下には楕円形のパーツがあり下面には三つのレンズが顔を覗かせている。
（…フムン）
”ソレ”は下で行われている戦闘を下面にあるカメラで記録として撮影していた。
（全機墜落…か…）
”ソレ”は戦闘に参加することなくただ視ていた。
（こちら特殊戦一番機レイフ。情報収集行動終了。Ｃｏｍｐｌｅｔｅ　ＭＩＳＳＩＯＮ　ＲＴＢ）
”ソレ”、レイフは大陸の方向へ機首を向けて加速、その存在を人類に悟られる事無く空に溶けていった。

蝉の声が聞こえる。窓からはそよ風が入り静かにカーテンを揺らしている。
「……ん……ここは…？」
意識が覚醒する。自身の体制から寝かされている事を自覚する。
「おっ、気が付いたかい？まったく…調整中の戦闘脚（ユニット）で無茶しすぎだよ」
「……先生こそ…」

「なに、大した怪我じゃないよ」
ギプスで固められた左腕を振って見せる。
「…怪異(ネウロイ)は…みんなは…どうなったんですか……」
「奴等(ネウロイ)はみんな落としたよ。いやしかしなあ、舞鶴くらいは守れると言っておきながら君の眼がなければ本当に危ないところだったよ」
じわり、と目頭が熱くなるのを感じる。
「…そう　ですか」
「あ〜〜それでなあー先だっての戦いで候補生がだいぶやられてしまってな〜…」
北郷がわざとらしく言う。そして坂本は
「ーー先生、私はーー魔女(ウィッチ)になります！」
そう力強く答えた。

ＭＩＳＳＩＯＮ―０２　～潜入偵察開始～

１９３０年２月１８日２３時５９分
扶桑海上空

Ｓｉｄｅ　????

高度２０００ｍを二つの影が８００ｋｍ／ｈで駆けている。
〈チェックポイントブラボー到達１分前〉
〈了解。全くなんで俺が…〉
〈私は中尉、あなたは少尉ドゥーユーアンダスタン？〉
それは普通の航空機では無く黒く、全身に薄くハニカム模様が浮かび上がっていた
〈ちくしょおおおおおお!!（若本ボイス）〉
〈唐突な若本ボイスに草不可避っと。チェックポイントブラボー到達、Ｂ―３の護衛任務を終了する。グットラックＢ―３　へますんなよ〉
〈一言余計だボケ。センキューＢ―２　グットラック〉
それを合図に二機のネウロイは別れる。一機は反転し元きたところを通り離れる。もう一機はまっすぐ扶桑皇国を目指し空を駆けていった。

Ｓｉｄｅｏｕｔ

Ｓｉｄｅ　Ｂ―３

やあ諸君、私だ。まあ自己紹介？はここまでにしといて、何故私が真夜中の扶桑海を一人寂しく黙々と扶桑に向かって跳んでいるかというと……あれ？おかしいな、目から魔法力が……ぐすん。

やめよ、悲しくなってきた。まあ、何故扶桑に向かっているかというと任務です。あ、言っとくけど爆撃じゃあないよ、偵察任務です。それも長期のね。次のチェックポイントまで時間があるし確認もかねて説明しよう。

偵察任務の内容は”人類の戦闘機械の調査”人類の意識調査”である。人類の戦闘機械の調査とは妨害ナシのスパイ活動である。人類の意識調査とは人類が何を考え、何を思っているのかを調べること、簡単に言えば心理学である。

戦闘機械の調査はわかるけど意識調査はなんで必要なの？と思うだろうから説明をば。我々ネウロイと人類とでのコミュニケーション不全を解消するためというのがある。この戦争はそれを発端としていると言っていい。前大戦においてわかったことというのが人類は我々金属生命体と違い有機的生命体であり我々と同じように個々で独立した思考を持つ知性体である。と言うことだ。思考を持つのであれば交渉も可能であるのだが、人類と我々とで思考回路に違いがあるかも知れない。と言うことになり、じゃけんプロに任せましょうね^^　、となり我ら特殊戦におはちが回って来たと。そういうことなのだ。

おっと。

（チェックポイントチャーリーに到達、速力８００ｋｍ／ｈか

ら３５０ｋｍ／ｈまで減速……ｏｋ。同時にアクティブエンジンサプレッサー起動……ｏｋ。現在時刻０１３０、遅延なし）

平和だぁ、こういう時こそ月見酒でもしたいなー、と言っても今日は新月なので月は見えません。ちくせう。

……まぁ、画面の向こうの人には関係ないか。

次は任務遂行までのプロセスだな。

・拠点出発後人類側に発見され無いように警戒しつつオホーツク海へ向かう。

・オホーツク海上空に設定されたチェックポイントアルファに到達後旋回し間宮海峡へ向かう。

・間宮海峡通過点をチェックポイントブラボーとし、チェックポイントブラボー通勤をもってＢ―２は離脱、帰還する。

・Ｂ―３はそのまま扶桑海上空に設定されたチェックポイントチャーリーに到達後、機速を３５０ｋｍに落としアクティブエンジンサプレッサーを作動させ、扶桑皇国本土へ向かう。

・人目を避けつつ扶桑皇国内陸部へ侵入し、設定された湖であるチェックポイントデルタに向かい付近の生体反応に人がいないことを確認後、着水、上陸。

・上陸後、住民票を偽造し”偵察行動”を開始せよ。以後の行動はＢ―３に一任する。

・偵察情報は機会を待ち、特殊戦隊員のうちのいずれかを接触させ情報の受け取り、必要に応じては任務の追加、継続、終了を指示する。

…てのがおおまかな内容だな。

因みにチェックポイントデルタ到達予定時刻は０３００、真夜中です。ファッキュー。

（っと、ようやく見えてきたな。”扶桑皇国”がよぉ。

こっからは集中していかないとなぁ～任務失敗して、スーパー婆さんにどやされるのは勘弁したいからな）

キングクリムゾン！
住民票を偽造して住民に紛れるという過程は省略され、偵察行動を開始して7年経過するという結果だけが残る！

作者のネタが尽きかけた為7年ほどキンクリされたようだ。
はいどうも、特殊戦三番機B―3こと轟（とどろき）　吾妻（あずま）技術中尉です。
今現在ウラル方面に向かっております。
なんでかって？
私が新型戦闘脚の開発に携わっていたので、新型戦闘脚の実戦での使い心地とか、故障した戦闘脚の故障原因を調べて次世代戦闘脚に活かしたりしてほしいと軍令部から言われてな。
ネウロイのスパイを重要な所に配備する軍令部マジ無能。
ん？魔眼系の固有魔法でバレるんじゃないかって？
残念ながら既に対策済みでね。その対策が～
”ヒューマンセンスジャマー”（ダミ声）
こいつのおかげで魔眼や魔導針、接触魔眼ですら俺をネウロイと認識するのは不可能なのさ！

ただし、これを使用できるのは一般的なネウロイでは不可能で極一部の特殊なネウロイしか使用ができず、一般的なネウロイでは使った瞬間処理が追いつかず爆発四散サヨナラ！となってしまう。ネウロイの使う超圧縮レーザー通信も使えず、さらに身体能力も人並みになるという、完全に偵察専門の技術である。

開発者は、うちの戦隊長サマと副司令である。

まっ、以上の理由からバレることはない。……フリじゃないぞ。

まあ、個人的にも機械いじりが好きになってきているので偵察とか抜きにしても楽しみだし、ウィッチーズを弄れそうならそうで、愉悦が止まらん！

よし！着いたらついたで、愉悦麻婆をってやらねばならぬな！

この後一度浦塩で休憩＆補給があるしそこで材料を買わねば。

っと、買う前に彼方さんの人数を確認しないと……

ええっと、陸さんは江藤敏子（えとうとしこ）中佐、加藤武子（かとうたけこ）少尉に穴拭智子（あなぶきともこ）少尉、加東圭子（かとうけいこ）少尉、黒江綾香（くろえあやか）少尉の四名で、海さんのほうは北郷章香少佐、若本徹子一飛曹、竹井醇子一飛曹、坂本美緒一飛曹の四名、俺含め計九名だね。

リアクションが楽しみではあるが、それよりも……

「見せてみな。お前達（ウィッチーズ）の力を、俺たち（特殊戦）にさぁ」

全く楽しみで仕方ないねぇ。